片桐

藩鑑

百十六

内閣文庫
和書
三四六八二號
二八冊
一五九函
一一二架

内閣文庫
番號 和 34682
冊數 278 (117)
函號 159 1

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑巻之二百一目録

カ部二十

片桐東市正源且元

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

藩鑑卷之二百一

片桐東市正源且元

一慶長十九年九月上旬より市正作濱書
正信ゟ〻八〻より天海上人（南光坊僧正ゟ）二人
見ゟと號し徳願寺より市正より
對面し種〻物語の序より正信申け
る八今度禮の儀より関東調伏の文あり

棟札の書やうよろしくすなはち大
坂表にとゝまり兵具を調へ浪人を集め
合戦の用意あるべきと顯然として陳
防の言ふべきんなるにより天下
の人心底に疑ひをなす
太閤死の時に横り公の時に散せし此
んや伝て
公の思召しも今の如くんハ近き内

に兵乱あるべんと推量とめくさる
貴客忠と思ひ深く計り遠く高りて
天下静謐すべきことと申さるるに
近日召出さるゝとゝ時に兵相ハ
らく思案してやけるハ天下の諸人
安堵すべき謀中く愚案に及ハず故
いかゝ客の心底と聞んこと信ずゝ
ハ予ゝんに思ふんに思ふ而已と申すべきも

天下の備人安堵して世上静謐すべき
ことおもふに三つあり一ハ秀頼公今の
世居城と云て他國より移らせ給ハ
可申候ハんかなの里ハ大坂城ハ日本
無双の要害なり此里へ世人起とあ
りて秀頼公謀叛と企て大坂へ籠
城の用意あるよしと風聞す是秀頼
公大坂へ立籠よりてあるもー

他國へ移らせ給まゝこの沙汰立
而ハ止んかたき一つ二つハ秀頼と
大樹とハ御父子の御仲おとなしからぬ
ハ以後御節ハ関東へも下向あり
て水奥のおもひとあるべきまゝ備人
共疑ひ心ハ散せん是二つ第三ハ
秀頼公の世母堂ハ
大樹の御妻而ハ速板なり且ハ世對

而の〳〵め且ハ天下安全の世ならしむる事
ハ先ハ東國に世下向おもむき給ひて
諸人の疑と散ぜ〳〵給ひ靜謐の基〳〵
〳〵さらハ三箇條何ぞ有りとも貴客う
けしゝて秀頼ゟと諫め奉り給ふ世迄
ハよしとゝて天下ハ取も太平〳〵之
〳〵と語りけ給ハ天海上人も西信の
思意実ゝ天下と平均するの計らと

ヤさ給けさハ片相聞て取も國と安
ん〳〵天下と平〳〵するの術ゝ中
ゟとゝゝくとこの三箇條ハ能知ゟ
天下の大事秀頼ゟ世一世の浮沈こゝ
三箇條ゝあり下と〳〵て〳〵〳〵
〳〵さ事ゟりと中けゟ片相意
ハ何ハ事ハ西信の私の思意ゝてハあ
〳〵す

大師西の正面高とうけて自分の思
案を語りあひ我が正倉のあとと聞
んとなりなりんあるとも一は
三箇條一つも正引あひといふ名
事の破さとるべんすべくく
謀めらへしとおもひけさ八中よて
同と皆て秀頼公の正ん底八最初より
ーすーこと〳〵く御ら

公を敵對の正面者あひ一あるとも八天下
靜謐とさを聞るれハいるて正正引
あるべんやくく思高なくく
一三箇條の内諫言仕べんとすけさ
ハ中ものし天海上人も出ぬるへ一と諫
言ーてとのくく宿所を海りけるを
後中ものエ部外方より市西方へ使者
とをハーて徳能寺ハよりと遠く

て打ちの會合も公に任せず安西の
函館に移る一と市に送りけるに八尼相
やがてかの函館に移る九月九日重陽
礼賀儀として出仕の大名群と成
す晩に帰りて市西と沛前に五寸
浪花軍記によいたく九月九日式礼
終りて和泉上野外方より内達あ
る明日大坂の沛返答出へ、さらーと

而ゆる出返答あり、てい逗留あり、
一上坂の支度あるべ、さらーと
中送る片相氣をひかゝ寄に用
意す時に十日なと云
即ち出仕して沛目見とりさすとこ
ろに久〳〵く幾府に逗留太儀のよ
と仰せ出次に今度の一儀と存じめ
たまもく任年秀頼ゑへ頼ミ来

国立公文書館
National Archives of Japan

さる浪人よハ扶持すへしと板露す
るゆへよ日本國中の溢者大坂場よ
充滿してあるゆへ夜討強盜あり
ひハ往還の旅人とあやまりすき何の
用もなき上秀頼公の近臣者しか
さよ兵具と調へ弛せ引と習ハすを
聞えあり凡太平の世よハ敵と言て
ゆと貯よしてこと万民安堵すへさ

よ何の用ハありてゆ兵と集め兵器を
調ふや世人合戦近さよありとゆ
て世と危ふむ色とこと不思議の事
とおもふ今度大佛殿の撞の銘
よ字ゆ偉の字と断て國家安康の
文ハ
家康と切て國と安んするとゆれ
例ゆりなし調伏厭魅さるのしー世

国立公文書館
National Archives of Japan

以て是と謀へ二心と以て知る大坂
より兵を集め武具を調へらい秀頼謀叛
れ企ありとなへ事を分明に相知
さりと仰せらる時より片相違て報
申けるハ秀頼ハ浪人を招き集め
そよりて日本の城花多大坂城
より充満一往還の人を侵掠して狼
藉を振舞へ一世耳に達する事

一

秀頼ハの不幸とせ一子細ハた
とへ此謀叛の企ありともあるべハ諸
浪人或ハ山賊強盗の類を以てハ何一
て
将軍家に対一奉り一日片時もいと
み我心を苦るゆと治んやし一実に
此謀叛の志あるハ従ハさるまても古
秀吉ハ恩顧の輩とこを相語へさ

此事ありし頃ハ備國の大名等ハ觸れ仰せ一廻文ありや否や急度此旨明と遂ゝられへ一浪人等ハ大坂ハ集り居ると以て不審と為さと今案するハ大坂ハ而廣く物事賣買下也一て貧賤の族渡世ハ安んー遠國ハ居住仕ら族ハ生れ郷ハ捨て世と送るも安一と之ともその國

一

れる獲人より外ハ身上と持く（さ主人ハ一駿州武州の西國ハ備國の大名小名ハ一とく〳〵系勤仕り繁昌ハ之の鎌倉近代の大坂ハ百倍す元日ハ六十餘州の人十一て四五つハ駿武の西國ハ集り居さり此ハ浪人主君と求るハその仮りあるかりとハ之とも繁昌ハ偏て人

多く賣買甚だ言直にして貧さも
れ居住永く成しまして大坂堺
ハ西國大名往還の道路なれハ渡世も
成やすく主人と求るに依り此所
に浪人集り居申候種の船ハ
韓長老老と書すいさゝか秀頼公の
所望にあらずすまし韓長老心あり
て老と書申しものもあるべしすべて

に不祥の言ありといへども此不審と
為るに及ひていハ如何陳申に按ず
一説に世人文句に種々の理を付て
唱ふ一上聞に達すること尤角秀頼
公の此不運と申へさう実に
公と調伏一事なるへくんハ何を天下の
諸人の見聞する種れ船に調伏の文
と疑申さんや老と以て無んあさ

世の中興衰を加へ一つまり公私共
大幸福に過ぎ〳〵さる事偉て言
上す仰ぎいたく〳〵種の招ての巧みさ
に嬰児に知らすんある華雅を
と感とせんや祝生とも海陳防の上
に移見と題して印て人の嘲りと泣ん
身の難と遊きてんさめて偶と吐くに生
人の恥辱ありまるに市西の一而と

用ん〻個一
家康に齢七旬に臨り席久〳〵
す平常におもに秀頼公も定めて
大樹同意に者別あるべしと推量あ
くらす而にさに〳〵て結句私
と拝ら〻
家康五世の内すら別のことも一
没後にとそれに秀頼と

大樹と連枝の中不和に成て天下の
兵乱堂と指らこと一市四それ深く計
り遠く慮りて後世に取り秀頼と
大樹と水魚のおもひとあり太平の化
とゝすゝ計と仕らへさ吉と作出さら
且元異りてゆけらハ天下安全の計来
ゝ愚案延きに及ハすとゝ雖も偖
秀頼ら居城と他國に移さるゝ秀頼

公時〳〵関東へ下向おゆ〳〵ますゝ毎儀
迎殿と賀とするゝ以之箇條の内何也
ゝりとも秀頼ら正形引に とゝいてハ
乞天下の佞人疑と散すへさ事也
とも以之箇條ハ皆大儀にて上に
寵ハすんハ私と一て定めらさ
也ゝりゝ他也とも迎殿正下向のゝに
とゝてハかゝハさるまても愚意の趣

よて諫言一度ハ院ハ往昔秀吉
公と小牧に合戦の以後に和睦の儀お願
ひ秀吉に毋堂大政所と人質として
遠州濱松へ参ハさせ一例あり秀吉
さも彼のことし一況や秀頼ハよい
てとや定めて取引あらへさうと言上
すをのち市正和泉守上野介等一対ヤ

ケうハもー泥度に下向ハといてハ江
戸表の邊ハ四五町四方ハ面敷と
さまり新宅とつくりて濱帰あらや
うハ仕りさ吉ヤケさハ宅地の事
而望ハ仕せうと一と仰出さ即
ち市脚とさまり仰ハいとく返答と
北労思召ハ而ハ院ハ今年も去
ハ過て市書脚の時節ハとりぬ市正ハ

早く西上して休息すべしと上意
によて西国探索いたさるべし西の長服と此度
つゝしまさるを市正は持病再發
して殊之快しゝさまとも沖頃の此
小袖と共用して御目見す仰に曰く
且元は病氣なりとゝ雖とも偽はる西の
長服大に似合て尤若やさるべし
上意によて退出すはとさ市正上郷外

に中けるは此服さまゝとゝ雖とも病
氣いまゝ快しす五三日も療治
して少し減するに及ひて西立るさ者
中けさはんに任すべさに仰ける
市正は兼日本多作源吉正信と緑者
なりし更に被一族者の死去日に
に倍せり
大佛西ましし廣く此使と者いさ此病

氣の事と存ぜ[illegible]めさまひ此藁をあ
とと陽しる　浪速軍記全解

一　片相市正儀ハ市[illegible]作撰る録あといひ
[illegible]年入魂の元中[illegible]くゆへとも氏
度ハ德飯寺より警固の新よつさゝ[illegible]
し皆指却[illegible]ハ沖方向別條
これなくとあるよつさ谷中よりの
音信音物数々さんもこ[illegible]ゆとり

あるゝ而よ事外の女中三人儀も江戸
より帰足上り七間町の旅宿とハお止め
大郡を波出函館へ蒲茅登城ゝ
て江戸表の相[illegible]るとも上沖城の女中
方と雑談こ[illegible]あるゝ所大坂の此毋ゝ
よしやゝて江戸表へ此引移りのよ
よゆへハ以後ハ[illegible]ふとく此ハ安く谷
へし度く此国よ無りやすくと何

さも有難ひことあるつさ
三人の女中たさま御書さ不審の思ひ
とあり市西籠窟見聖とてやうす成
見合ひ八幡方の音信物と山のことく
積上け室内ことの外うるわさひうを
八ふとくふ沢山さくを早て同
所けるに市西屋敷
大師西橋の此ねんころ浅くすに
小袖ふとまて乃載るさを此ほ
ますにつさまとりて三人の
女中市西とうるさひくみ出りり
事記り俗に八秀頼の滅亡と八西盛と
なり
右の趣雑波戦記を外の記録等も
書記ニ也あり此へとも少く異る
ひこれあり分明なるすに我等の

若さころ牧野又兵衛と名乗り當年人側に事ろ仕り居申さるもの、物語り、当時代のあるもの、八実説にしても色あるべくさぞと存ずると以て書き記す中すぎ居り　吳竹庵稿集

一九月十日片桐且元駿府と發し大坂へ赴く途中大藏卿局西栄尼且元に駿府にとゝして差遣の、ことゝ数回へ

ともに委く告げすは夜ち山陽に到り二女且元の旅館へ来り又同人ことゝ始れ、こゝ且元答て曰く

大師所ろの命代事ろ秀頼君より唯誠恩の使命と勅心へ上野介屋地院色と告へ、こゝ後日と経て事命ら さるよりり大坂に海ろうと語りぬる ろ暫ありて彼二人

両帝不の起ひ解けさせ給ふさの思
意と同じくより秀吉以後融和あり
親しく睦しくなり給ふ秀吉の
遺命にもけかるさい諸列侯の妻子秀
頼を江戸あり給ふるに毋を江戸
へ移らせ給ふるすんハ大坂
城を献せ給ふ此他國にて討死と云ハ
せ給ふるに三條の外ハ思意あるさ有と
雖も事なきと語る二女もあるへさこと
なりと雖ましより二女ハ旅館に帰り
且元ハ三箇條と雖ハ
大帝不君に異ミし面談するりと思
ひ俄に暇遍一夜とりけて大坂に上る
右三川志

一 大能卿の局西栄尼古山の彈にとして
片桐且元ハ話と聞さ殺府にて毋を

れ江戸へ移りてせしことを聞も
驚く思ひなり今又市西の語りと
聞く我皆人〳〵破産せしかく
なりさて三箇條の命令にあり此
れいよ〳〵市西ゝと愛〳〵関東一忠と
書さんと三箇條とのくさりと云
より急さ伏見と江船よりして大坂
海より直ちに登城〳〵秀頼及ひ淀君へ
市西関東へ出〳〵上野分り婚家
とりて彼一族ハ勿論佐家〳〵より種〳〵の
賜しのと沼三箇條と告げ出るを質
として江戸へ下〳〵まゝんと出館の
ことまて告きり
大師西の寵愛と受け出欲の時服と賜
りを後ちも〳〵菓子とまゝりて
病と問ふ〳〵我皆帰渇のとさい

此父子のことを厚く弔ふ間ひさまんこ
箇條のことハ皆て語ゝせゝきて遂
中ゝして市正を事と告く市正ハ
ゝ遠ひかゝとゝ滝尼ハ大ゝ怒り我を
故大閤の傍ゝ陪侍すといへとも秀
頼の実母なりまのゝすゝ信長ゝ
及ひ
新将軍のまんゝ連枝なりと市正昨年

ゝとして我言を以て三箇條と
定め我と偽り那さ関東へ下ー已きり
栄華を立んと欲すと見て不義の志
といひ秀頼と茂如するなりと或ハ
偽り或ハ那く秀頼し怠怒ゝすゝ
滝尼憤りゝ信長と治長と近く咲人市
正三箇條と告けけ
大師丸く福ひこの身と立んと謀る間

八市西の一旅と謀罰一関東と勝敗と
決せんと欲することを如何とする治長
聳て且元と憎み事よりて彼と
除かんと欲する甲斐幸ありと思ひ居
て曰く近年列國の諸侯武西城の
修築に金銀と費一丈のとなるすに尾
州名護屋越後高田及び丹波篠山亀山等
其他城の造作に徭役の疲労甚しく
に関東の傾慶せんことを願ふとさ
ある生ハ氏時に及ひて先君の恩顧と忘
れす速に秀頼君の命に応一兵士
雲のごとく来り集り勝利と治ることを
疑ひ一早く市西と謀罰ありて兵
を挙げらるし一と勧む大野治長淀
邊乳ハ元より且元と不和なる生ハ種々の
言を設け且元と譖す　同上

一市西番にて氣色しきりとあるゝさ
ればとも為り体長にも及ぶす毎日
登城す定めて今度幾府への出張接待の
談合やありけん大事の出張合日〻に
こ迄ありとゝいへども皆てわ〻人の
推量にも及ぶす諸人の雑説もわ〻
静にて別儀なかりしに九月の末
俄に是元より多の起〻ありさる出

来す九月廿日過にや今度の相談
市西ゝ底に疑ひ出しし出張にもわ〻
さるとゝさハあ何あるゝん内證聖ゝ
らす兎角に討果し成さるより外い
あるゝさるゝにや既に至内
地様り国さ廿四日に成九日に成て出張
合の節知るゝ一と定めし一仕様一
ゝハ小廣目録概通り会閣へ出るあよ

て付箋へ、さよ　以前と申し小廣目
しも生用意ありり市西おもひ寄さ出ハ
登城早晩のこと〳〵よりハ差支り一よ
い〳〵ありてや後れはも移りぬ出ハい
よいよ座中おの合軍〳〵さるり
ちるるのハすまさ出とも市西ゆ
一も知〳〵て即ち此前よりて暫く儀
も此座ゆ〳〵此目今日ハまつ西出ハ移

暫く此後合も此座ゆ〳〵夜中より限るす
仰聞〳〵出ゆ〳〵とのよ〳〵ゆ出ハ秀移ゆ
ちゆりて西海り休長仕ゆ〳〵一暫く後老
あ〳〵ハ中老ハいす〳〵一まゆ生方宿
よしても分別仕中上へ、さ前此遣よして
即ち此前と立修理竹田永翁も此近習
共皆〳〵も立会関まして市西と送り出ゆ
此小廣目と千葉家の取つさ芭蕉の目

とて帳下に出あり張所の鎗芭蕉ゟ
里ゟりを出まして市西小性刀と持
十餘の出張人右筆彼是を沢まして拙合
市人ゟとつて毎日送る里芭蕉の召ゟ
彼是添に引付出るゟ小廣召ゟして
し程評議お遠し早晩のことく出会
関ゟて何とも脳乞海ゟ出会
関所唐門番所ゟ市西家中勤仕するゟ

ゟりまして御徒侍作番ハ皆番所ゟ侍
居出門番ゟハ市西言葉と掛徒侍ハ作ゟ
て桜出門ゟ荷物地ゟして五十人も
りとつを通を桜の馬場ゟ細ゟ

山中日記

一片桐市西ハ九月二十三日ゟ大坂へ海り
直ゟ出仕ゟ右之間條の通ゟ
達一ゟ人ゟ女中を達て市正

儀と種々あり一さまよ取成さへ亟
しと以て秀頼母子ともよ何の所も
色々大切の儀よりハ吉日と撰び
母ら對面の上直談あるべさ召えあり
休息ゆへ一ゆへとの儀よて市正
成敗ゆへされまより一向よ片相
ゆとりり 吳竹寄徳集

藩譜巻之二百二目録

か部二十一

片桐東市正源且元